



なごやじょう 名古屋城

子ども博士になろう



がくしゅう はんしゅ せいかつ へん
学習シート「藩主の生活」編

— 藩主は、どのような生活をしていたのでしょうか —

はんしゅ なごやじょうない
藩主は、名古屋城内の
どこでくらしていたのでしょうか



なごやじょうない てんしゅ ごてん
名古屋城内には、天守や御殿などた
くさんの建物がありました。では、藩主は
まいにち せいかつ
毎日の生活をどこでしていたのでしょうか。

1615年(慶長20)、藩主の住居で
あり、藩の政治を行う場所(政庁)として
ほんまる ごてん かんせい しょだいはんしゅとく
本丸御殿が完成しました。初代藩主徳
川義直は、この本丸御殿で、生活して
いました。1617年(元和3)に二之丸
ごてん た げん になのまる
御殿が建てられると、1620年(元和6)

よしなお にのまるごてん うつ す
に義直は二之丸御殿に移り住みました。
ほんまる ごてん しょうぐんせんよう しゅくしゃ
そして、本丸御殿は、将軍専用の宿舎
になりました。

ほんまるごてん はんしゅ じゅうきょ つか
本丸御殿が藩主の住居として使われ
ていたのは5年ほどで、その後は、二之
丸御殿が、江戸時代を通して、藩主の
じゅうきょ せいちよう おしろ ひとびと
住居と政庁となり、「御城」と人々から
呼ばれていました。

めいじ時代はいり、まもなく、二之丸
ごてん かいたい ぼしよ
御殿は解体されました。その場所には、
1873年(明治6)に名古屋鎮台という
りくぐん せせつ お
陸軍の施設が置かれました。

にのまるごてん
二之丸御殿

ほんまる ごてん
本丸御殿



なごやじょうない
名古屋城内マップ

藩主は、どのような暮らしをしていたのでしょうか



藩主は、どのような一日を過ごしていたのでしょうか。12代徳川齊荘の側につかかした家臣が残した日記をもとに見てみましょう。

城内での私的な生活は、二之丸御殿の中の「奥」と呼ばれた場所の建物で行われました。一方、藩主としての仕事は「表」と呼ばれた場所で行われました。つまり、毎日、「奥」から「表」へ移って仕事を行い、仕事が終わると「奥」へ帰るという生活でした。

それでは、朝起きてから夜寝るまでの一日のおおまかな日課を見てみましょう。

【朝起きてから】

朝、午前7時に「御寝の間」で起床

します。その後、うがい洗顔をすますと、御髪番と呼ばれる人が髪を結び、朝食をとります。

【先祖の位牌を拝む】

朝食後、御錠口が開かれ「表」に出ると、着替えを済ませて、「御祠堂」へ行き、先祖の位牌に向かって焼香し、おまいりをしました。これは、一日の最初の行事で毎日欠かさず行われました。

【朝の挨拶を行う】

次に、「例朝御目見」といって、側近の家臣たちと朝の挨拶を行いました。時には、「年寄(家老)」衆が加わり、この時は、藩主から重要なことが伝えられることもありました。

藩主が普段会うのは、「年寄」や「用人」といった重役クラスの家臣のみで、一般の家臣と会うことはほとんどありませんでした。

藩主の食事を見てみましょう。

記録にある正月元旦の献立には、次のような品が書かれていました。

御本膳として、鱧、焼鳥雉子、御汁、田作り五段盛、開キ、蒲鉾、御食二の膳として、塩引鮭、貝盛塩鮑、味噌御汁、酒浸塩鯛

三の膳として、鯉の刺身、すまし御汁、海老船盛

御引次として、素麺、盛付雑煮

豪華な食事で新年を祝ったのですね。

ほかにも、正月七日には、「七種御雑煮」、

三月三日には、「菱形草御餅」、五月五日には、

「粽五本」など、季節の行事に合わせた

献立を楽しんでいたようです。

『尾張の殿様物語』(徳川美術館 発行)より

※文章の内容とは異なります。



祝膳復元(名古屋城総合事務所 蔵)

はんしゅ しごと
【藩主の仕事】

朝の行事を済ませた後、藩主には、様々な仕事がありました。その一つが家臣たちとの謁見(御目見)です。

月の内の一日、十五日、二十八日の三日間だけは、一般の家臣も藩主に会うことができる「月次御礼」という儀式がありました。江戸時代は格式(身分)が重んじられていましたので、格式に応じた形で行われていました。

御目見は、まず「中御座之間」で御年寄衆を行います。その後、「焼火之間」で御年寄列の人々や初出仕の家臣と会い、その他の家臣とは、「夜詰之間(夜居之間)」で行いました。

格式の低い家臣は、藩主が移動するときの通りがかりに御目見を行っていたそうです。

しやうがつい がい まいつきじゅう に には つきなみ
 正月以外の毎月十二日には、「月次講釈」といって、「夜詰之間」で儒学(儒学の学者)から「論語」などの講義を受けました。

べつ ひ には さくらの ま のうやくしや
 別の日には、「桜之間」で能役者から舞の稽古を受ける「御仕舞御稽古」という日課もありました。

また、矢場や馬場御殿で家臣たちの剣術・槍術・弓術・馬術などの視察を行うこともありました。

その他にも、領内の事情を把握するために、木曾山々の御囲材の説明を受けたり、城内の武具の管理を視察したりしました。天守・小天守・御具足多門・御槍多門・御旗多門・東弓矢多門・西弓矢多門・大筒多門など3時間ほどかけて城内を視察したという記録も残っています。



なご やじょうに の まる
 「名古屋城二之丸御殿」復元
 1840年(天保11)
 復元:三浦正幸/
 作画:藤田正純

